

迷路のなかの継走者

——読者について——

すべてどうでも好いというのがものごころつくはじめから私の裡に巣くっていて、ついに改め難かったところの気質である。私は日常のなかでたいていどうでも好いのである。ときには気になったような顔付をしてみることがあるが、それは気にすべきである状況への釣合いをとっている謂わば自然な平衡作用の現われに過ぎないように思われる。私がものを書く場合、このような気質からして読者をもとめるたちではない方が、とところで、いくらか書き進んでいく裡に、作者と読者のあいだの或る種の関係が、私なりに謂わば理論的に出来上ってきて、どうでも好いという気質を越えたところに次第に移り行ってしまった。その新しい関係とは、どうでも好いという本来の気質をまったく排除している訳でもないが、また、云ってみれば、正反対ともいえるもので、敢えて命名してみれば、*in confidence* 内証で、といったものである。

すべてにどうでも好い私はただひとつ私の上に取り除きがたく課された問題のみを論ずることが好きである。恐らく、夜昼ぶつづけて何時までも、もし軀が許せば、永劫に論じつづけたところで倦むことはないであろうと思つていたので、年少時から、私はその問題へまわりの友達たちをしゃにむにひきずりこもうとした。ところが、そのたびごとに私が知らねばならなかったのは、私がこれほど興味をもっていることに、他のひとびとはそれほど切実な関心を懐いておらず、それどころか、私の問題は風変りな興味として遇されることが普通と見なさるべきであるという何度繰り返されても変らぬ同一の体験であった。この同一体験の反覆は、必然的に、私に次のような疑問を絶えず反芻せしめることとなった。もし彼等がこれほど多数であるとすれば、たとえ彼等の関心の持ち方が正当でないにせよ、少くとも、私が興味を懐くものを私が正当と呼び叫ぶことはできない。そして、ひとたびこの命題が肯定されてしまうと、次のような結論へまではもはや一步であるに過ぎなかった。この私に関心を懐かせる重い課題は、一見、人類の歴史の上にたゆみなく露呈しているがごとく見えるとはいへ、事実には、恐らく、公けに論じてはならないところの或る種の論題の部分となつてに違いない。

公けに語ることなかれ、

それは迷妄に誘われやすき

幼な児を

果てなき永劫の場へ

導きゆくものなれば。

どうでも好いという私の天性の上に、ここに於いて、ついに、第二の天性が混入せざるを得なくなつた。訳も解らぬ、という標識である。私の思索的な性格は、パスカル流に云えば、兩端的性格であつて、つねに、根源と窮極が絶えず論題となつてつきまとい、それ自体に於いても、一種の自動運動をもつて茫漠と拡がるべき性質のものであつたが、それがひとびとの切実な関心を牽くものでないと思つたそのとき、それを敢えて扱うためには、さらにまた、敢えて積極的な仮装がそこにはどこされざるを得なくなつたのである。私は、ひたすら、私の論題のかたが解らぬように工夫をこらさねばならなかつた。訳が解らぬ、それを私の最初から最後まで旗印とせねばならぬ努力が、やがて、私の本来の仕事の構造と展開と、そしてまた、文体を決定した。理解の拒否、それがそのとき以来の私の表向きを決意となり、旗印となつた。けれども、出来るかぎり訳も解らなくする工夫を幾ひねりかして読者の退出を強要するその同じ箇所に、謂わば一本の細い糸となつて延びる毯を置き、私と同じような志向、同じような傾向を持つている人物だけに手渡して迷路を進んでもらう工作をまた同時にほどこしたのであるから、それは必ずしも読者一般の拒否とはならないのである。同じ問題に悩み、同じ傾向

をもつもののみが、或る論議に参加したとき、それを前方へ展開し得る能力をもつことを私は知っていたので、私との同一者には糸毬をひそかに渡す工夫をそこにこらしておいた訳である。もし一筋の糸のはしを綱めば、訳の解らぬ私の迷路は忽ちにして障壁がたたみこまれて全体が見渡せるようになってしまおうという構造に仕上げたのである。とはいえ、それまでの体験からして、この迷路へはいってこるべき同一者のあまりに少ないことを知っている私は、どちらかといえば、非同一者にさわってみられる感觸の異和感を如何に早く避けてしまおうかという工夫のみにひたすら耽ったといえるのであった。私が触発された生産的思考を迷路のなかで隣りあわせた次の同一者に触発するという私の本来の仕事は、できるだけの無人の迷宮の奥で、内証に、なされねばならないというのが私の鉄則なのであるから、訳の解らぬという障壁を築きつづけることがまず私の意識的な努力となったことは恐らく当然な筈である。そして、こと此処に至ると、すべてにどうでも好いという天性はこのただひとつの内証の仕事をもるための緩衝器として私に与えられたといっても好い感がある。いや、むしろ、無人の迷宮の奥でひとりでじだんだ踏んであたりを敲ちまわる或る種の憤怒があまりにうまくゆかな過ぎるので、その場に飛びあがりたがる私のいくらかの天性はすべてにどうでも好いという八方破れの明らかた天性にまで大きく仕立てあげられたのかもしれないようにも思われる。つまり、私の兩端的思考のちようど真ん中には、自身である以外に自身を考えられぬ思考形態についての不快、ものごころついたときにすであつたために私にとつては根源的と思われる或る種の核が潜ん

でいたので、さらにまた、自身のみにかかりをもっているそれについてはひとにどういうべきことでもないため明らかさまな喜怒哀楽を養うことについて慣れ得なかつたので、すべてにどうでも好いといういくらかの天性が私の身についた錆びのような外装となつてしまつてそこにさらに訳も解らぬという様相をも呼び迎えるに至つたといふべきかもしれないのである。このようにして、さて、どうでも好いという私の旗印は、そこにまた、訳も解らぬ、という標旗を並べたてて置いて、出来れば、現在の時のあらゆる眼をかすめ、永劫のなかに或る種の休火山となつて埋没してしまおうと試みたのであつた。生産的思考は迷途のなかへひたすら単身ではいりゆくもののみに触発しつづけられるということを唯一の照明器として負ひ担いながら。

読書に耽つた時代に繰り返し得られた私の確信によると、ひとつの作品は、仮りに読む側の質が一定のレヴェルに達しているとしても、作者と読者のあいだに結ばれた相互の氣質や考え方や環境などの一致した部分しか決して味読されるものではないのである。従つて、非同一な志向を担つた読者には出来るだけ近づいてもらわぬような遠望を設けて置き、近づいてしまつた場合には自然に踏み外してゆくような工夫をこらしておくことは、決してひねくれたやり方ではなく、むしろ欠くべからざる礼節であるといえるかも知れない。まして、迷路に踏み隠れて営む私の仕事はこの世界の相を描いたひとつのタブロオでなく、敢えて云えば、この世界があつた方が好いか、ない方が好いのかの審判なのであるから。覗いてみて一見すべき何物もなく、ただ或る種の息をつめた裁断の氣配があるばかりであつて、そこに、この私流の生産的思

考のリレー的触発をひき受けてさらに迷路のなかの次の継走者を待っている類の稀少な同一者のみしか迎えないようにあらかじめ工夫しておくことは、いつてみれば、厳密な義務ですらある筈である。この世にはさまざまな種類の本がある。年少時に容易に感得されて中年時にも同じような興味を保持せしめるはより易く奥行きもある『ハムレット』のごとき作品が一方にあると同時に、また、他方には、中年時に至らなければその味わいの深さを知りがたい『ファウスト』のごときはより難く奥行きのある作品もある。ピラミッドをなして拡がっている読者のもつ質は、ひとつの時代のもつ質とともに、また積み重ねた年齢の質とともに、月齢のごとくに僅かずつ変化してゆく。けれども、そこには同時にまた、同一事を考究しているただひとり、の寂寥のなかに坐った同僚に味読される運命しかもたぬ一冊の特殊な書物もあって、恐らく、それは永劫のなかで埃りをかむったまま暗い書庫の奥に埋もれているのであろう。如何なる時代に於いても、或る事項の普及通俗化がピラミッドの底辺へ向って拡がるにつれて、それと反対の極点へ向ってもその事項は自らの本性を求めてひたすら進み行くのであって、万人に読まれる浄福の書とともにそこにはつねにただひとりの追試者にしか味読されない孤独の書があるのである。埃りのなかの一冊の錬金術書。恐らくは、私の仕事はこのような類の埃りをかむった専門書に似たかたちをまとしてひそかに迷路のなかに潜み隠れねばならないのであるが、さてしかし、ひとりの好奇心に充ちた追試者を永劫のなかで待っている一冊の錬金術書より私の書がより困った意図をもっていることは、もしひとりの継走者が迷路の奥にまで達し

てそこに私流の触発が行われれば、もはや私達はこの広大な世界を被告とする審判の陪席判事として、息をつめながら、迷路のなかを最後の断案のために駆け廻らなければならなくなってしまうのである。

〔近代文学〕三〇年六月号